

脱走事件

宮本 泰成みやもと やすなり

「キヤー！」

お母さんがさげびながらソファの上にとび込んでいた。

「ゴキブリ?!」

と、お母さんが声をふるわせながら目でお父さんとほくに助けを求めていた。

お父さんとほくは、知っていた。ゴキブリではないことを、知っていた。

ほくは虫や生き物が大好きで、昨年いねかりをしていた時、大きなカエルを五匹も捕まえた。そのまま家に連れて帰ったが、お母さんはほくとまぎやくで、大の虫ざらいだ。カエルも、とても苦手ですまたくさわれないのだ。お母さんは、

「どうせすぐにまた田んぼにかえすだろう」

「少しの間なら…」

と、何とか許してくれた。

気が付けばカエルたちはわが家に来て、もうすぐ一年がたつ。今でもとても元気で体もすごく大きくなってきた。カエルたちは生きているコオロギが大好物で、そのためほくは家で百匹ほどのコオロギも一緒に飼っているのだ。ある日、ほくはいつものようにカエルたちに餌をあげた時、失敗して数匹のコオロギが脱走して家のどこかにかくれてしまった。

「これはまずい！」

「お母さんに知られてしまったら、カエルたちは家にいらなくなるかもしれない。」

と、ほくはいっしゅん頭が真っ白になった。

お母さんが買い物から帰ってくるまで、お父さんと一生けんめいに脱走したコオロギたちを捕まえて戻すことができた。しかし、まだ逃走中のコオロギがいるのかは、ほくにもはっきり分からなかったので、心の中でずっとそわそわして落ち着かなかった。

ついに、コオロギがお母さんの前にすがたを現した。その時、ほくは、お母さんにすごく怒られると思った。お母さんは目の前で走っていたコオロギにびっくりしながらも、

「そうだったの！コオロギだったのー。早く捕まえて！」

と、お母さんはソファのかたすみになんしながらもまったく怒らなかつた。だからほくは、お母さんに聞いてみた。

「お母さんは虫とかが苦手なのに、どうしてカエルもコオロギも飼うことをゆるしてくれたの？」

「生き物にむ中になってキラキラしているあなたの顔が大好きだからだよ！」

と、お母さんはほほえみながらほくに話してくれた。

そういえば、ほくの好きなこと、やりたいことで、お母さんはいつもほくをおうえんしてくれている。

お母さん、いつもありがとう！

そして、大事なことに気づかせてくれたあの脱走したコオロギたちにも、ありがとうと言いたい。